



立正大学の海外仏教遺跡の調査

館長 池上 悟

仏教は印度に発し、中央アジアを経由して中国に至り、朝鮮半島を経て日本に波及しました。以後仏教は我が国の文化の基底をなす重要な宗教として発展し、現在に至っています。仏教考古学は宗教考古学の重要部門として、考古学的手法をもって仏教の発展を研究するものでありますが、調査の対象は日本列島内の遺跡にとどまらず、海外の遺跡にも及んでいます。

立正大学は、1967年から10年間にわたり、ネパール王国所在のTILAUURA-KOT遺跡を発掘調査しました。この遺跡は、釈尊出家前の青年時代を過ごしたカピラ城の比定地の一つです。発掘調査によって釈尊在世期の遺物も確認され、カピラ城の有力比定地として位置づけられました。

それから40年経過して、中央アジアのウズベキスタン共和国のテルメズ市郊外に所在しているKARA-TEPA遺跡の調査を、2014年から開始しました。この遺跡はウズベキスタン最大の仏教遺跡であり、半世紀以上の調査によって、洞窟遺構の前側に日干し煉瓦を積み重ねて仏塔、僧坊などを構築した南丘と西丘、日干し煉瓦を積み上げて大規模な仏塔と僧坊などの伽藍を構築した北丘と、地点別の様相の違いが明らかになっています。

何回かの増築の結果、一辺35mの中庭の周囲に僧房を配置した僧院と、この南、北、東側に大規模な仏塔が残されています。1～3世紀のクシャーナ朝に開始され、4・5世紀頃まで寺院として使用されたことが分かっています。調査の目的は、伽藍配置の変遷を明確にすることであり、個別遺構の様相を明確化することによって信仰の内容を明らかにすることです。

立正大学は仏教を基とする大学であり、仏教を中心として430年間に発展してきました。海外仏教遺跡の調査は、立正大学の特徴を社会に喧伝するために有用な事業と考えられます。特色ある研究として、KARA-TEPA遺跡の調査が継続的に進められていくことを望みます。

第 10 回企画展

立正大学の海外佛跡調査

—ティラウラ・コットからカラ・テペヘ—

平成27年6月19日(金)から10月31日(土)にかけて、第10回企画展『立正大学の海外佛跡調査—ティラウラ・コットからカラ・テペヘ—』を品川キャンパス9号館エントランスにて開催いたしました。

今回の展示では、立正大学が行った過去と現在の海外佛跡調査の成果を纏め、パネルにて紹介し、併せてネパールのティラウラ・コット遺跡出土資料の展示を行いました。

立正大学は、仏教系大学として創設された国内屈指の伝統を誇る総合大学です。その立正大学が海外で実施した仏教遺跡の調査は、昭和42年からの10年間にわたって行われたネパール王国のティラウラ・コット遺跡に遡ります。これは、釈尊が出家前に居住した「カピラ城」の有力比定地の調査であり、釈尊の時代を示す北方黒色磨研土器を確認するなど相応の成果を挙げました。そして、遺跡はシュンガ朝(B.C. 2～1世紀)～クシャーナ朝(A.D. 3世紀中葉)の頃であることが明らかになりました。また、東西約450m、南北約500mで南北に長軸をもつ長方形を呈する城塞遺跡であることがわかり、4つ以上の門、2つの貯水池、8つの遺丘を有することが確認されました。

遺物は、鉄製品、青銅製品、貨銭、石製品、テラコッタ、土器、煉瓦などが出土しています。

これらの資料の一部は、現在、立正大学博物館で常設展示されており、非常に貴重な資料となっています。

平成26年度からは、中央アジアのシルクロードの地であるウズベキスタン共和国、古代バクトリア地方に所在するカラ・テペ遺跡の発掘調査を開始しました。カラ・テペ遺跡は、A.D. 1世紀～3世紀のクシャーナ朝を盛期として展開した、この地方最大の仏教遺跡であり、半世紀以上に渡って調査されている重要な遺跡です。立正大学は、

この遺跡の全容解明と遺跡の変遷確認を目的として、調査を行っています。今回の企画展では、この2遺跡の調査成果を取り上げました。

この2遺跡は、所在地が遠く離れ、一見何の関わりも持たないように見えますが、ともにクシャーナ朝の領域内に入っており、また、7世紀の中国僧である玄奘の存在によって有機的なつながりが確認されています。

玄奘は、仏跡参拝と経典研究を目的として、629年に中国からインドへ旅立ちました。そして、その旅路において、カラ・テペ遺跡及び、ティラウラ・コット遺跡を訪れました。この事は、史実として旅行記である『大唐西域記』に記されています。

つまり、40年の時を経て再開された立正大学の海外仏教遺跡の調査は、玄奘によって結びついています。

関連事業

平成27年10月31日(土)に立正大学ネパール交流プロジェクトの一環として、坂詰秀一前館長による特別講演会「釈迦の故郷を掘る～ティラウラ・コット遺跡発掘調査～」が行われました。このプロジェクトに関連して、ティラウラ・コット遺跡の紹介パネルと出土品の移動展示を行いました。



企画展展示の様子

収蔵資料紹介

表谷(東)貝塚の縄紋前期土器

埼玉県富士見市難波田城資料館学芸員
早坂広人

はじめに

ここに紹介する資料は、横浜市港北区に所在する表谷(東)貝塚から昭和14年に発掘され、吉田格コレクションの一部として立正大学に保管されています。この資料には、諸磯式土器研究における高い学史的意義があります。

表谷東貝塚の調査と報告

表谷(東)貝塚は、明治時代から知られる篠原貝塚の一部で、昭和14年(1939)1月に、吉田格を中心に、地点貝塚1箇所(竪穴住居跡1軒)が発掘調査されました。調査前半の3～6日は江坂輝弥氏が協力し、後半の11～14日は酒詰仲男氏が協力しています。13日の実測・撮影は和島誠一氏が援助しました。調査の概要は速報されており⁽¹⁾、報告は、昭和17年2月の吉田の出征を“記念”して酒詰氏と江坂氏が執筆しています⁽²⁾。

この調査の出土土器は、繊維土器と無繊維土器の関係という観点から注目されてきました。調査中の1月7日、江坂氏は東京考古学会総会で、表谷東貝塚を「貝層より多数の諸磯式a類と、貝層下部より僅かの黒浜式、貝層下土層及び床面……からは黒浜

式を出土する」層位例として紹介しています⁽³⁾。しかし調査後の速報では「下部貝層及び住居址床上等には黒浜式と諸磯式が混出し」とあり、また、柱穴の一つに半分に割れた土器が発見され(第1図)、これを「柱を強化する為」と解釈しています。

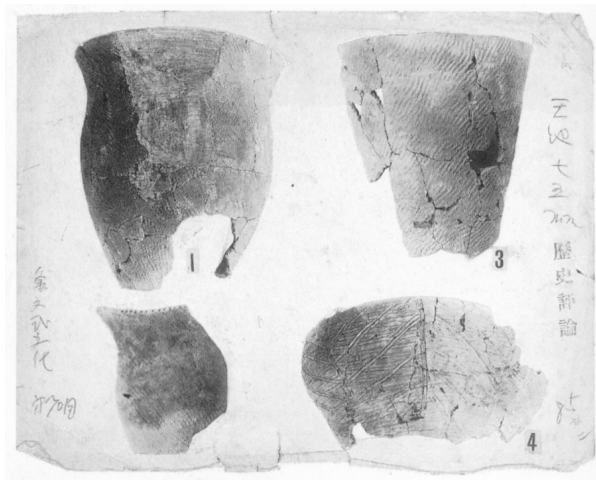
報告では、江坂氏が土器の記述を担当しましたが⁽⁴⁾、第Ⅱ類とした無繊維の土器は「表土、その直下の混土貝層、更にその直下の純貝層、竪穴隅の土層、床面等竪穴内堆積各層に包含せられ、殊に混土貝層以下には小破片⁽⁵⁾が見られた……斜行縄文のみを口縁部以下に施したものには口唇部に竹管工具で刻目……後述の竪穴柱穴内出土の大破片もこの器形のもの……」。第Ⅲ類とした繊維土器は「第Ⅱ類と同様竪穴内堆積層全体に包含され、殊に純貝層以下に大破片が多かった……本類の全器形を推測し得るものは床面から二個出土した⁽⁶⁾」。「後者から前者への移行は極めて漸進的で、本例の如く両者が殆んど同一状態で発見されるのを見る。唯第Ⅲ類の方が幾分下層に多いのであらうが、今回の如き発掘方法では、それさへ確認できなかった」としています。住居跡平面図でも床面の2点の土器と柱穴内の土器の出土状況が図示されています。

資料の公表過程

昭和26年(1951)、江坂氏は連載論文の中で“水子式”の事例として当資料に触れています⁽⁷⁾。「床面からは……四個の略器形を知り得る大破片が出土した」として土器4点の写真を示していますが⁽⁸⁾、当

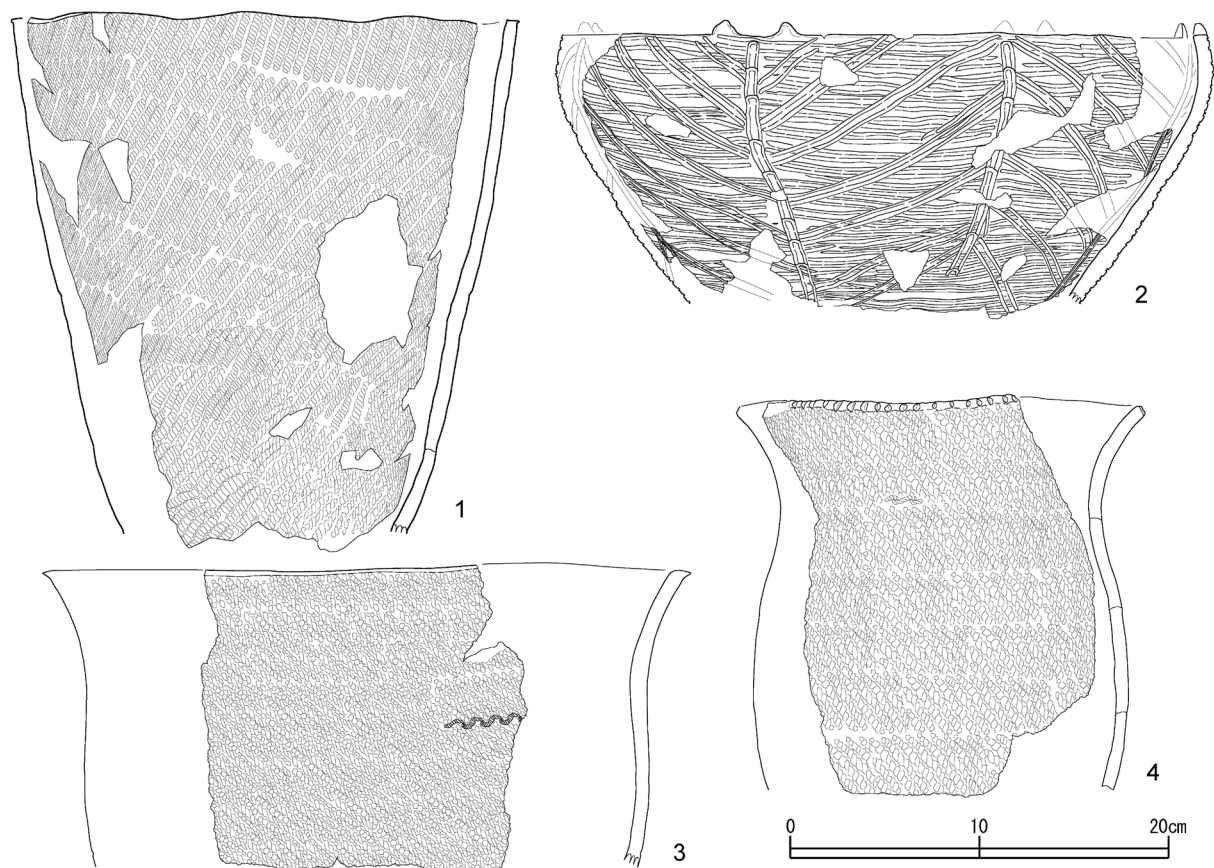


(四) 柱穴の中に丁度半分程に割れた土器の大破片



第1図 柱穴の土器出土状態

第2図 江坂論文原図版



第3図 土器実測図

時の出版環境のため不鮮明で、縄紋のみの3点とはともかく、文様がある1点は、斜めの平行線と横位の燃糸文(?)が見えるのみでありました⁽⁹⁾。

平成14年(2002)、江坂氏の原因版が公表され⁽¹⁰⁾、有文土器の横線は沈線であることが判明しました。

平成20年(2008)、立正大学博物館の展示図録に土器4点がカラー写真で掲載されました⁽¹¹⁾。うち3点は江坂図版と共通しており、筆者はこれにより資料が現存していることを知り、観察の機会を窺っていました。本年に至って熟覧の許可をいただき、5月24日に観察と撮影、6月29日に実測を行いました。29日は鈴木徳雄氏も資料を観察し、意見交換をしました。

資料の観察

表谷(東)貝塚出土資料として保管されている縄紋前期の土器は、展示4個体のほかに整理箱2箱分があります。関山Ⅱ式1片と諸磯b式の可能性がある2個体を除き、黒浜～諸磯a式に帰属する、比較的にまとまりがよい資料です。土器片に注記はなく、箱内に仕切りもありません。包装紙をちぎった「1.19 純貝層」

という紙札が1枚入っているのみであり、個々の破片の出土層位は不明です。

後述する復原可能5個体をのぞき、黒浜～諸磯a式の土器は126点を確認しました(接合や同一個体判定を進めれば少し減るかもしれない)。このうち、含繊維と判断した土器は68点です。大きさ10cmを越えるものを大破片と呼べば9点あります。縄紋のみの62点であり、うち口縁部は9点です。縄紋は単節を主とし51点(RL27、LR24)、無節は13点(L12、R1)あり、Lの破片の多くは同一個体の可能性があります。附加条1点(LR+S巻2R)で、2種の原体による羽状構成は無く、Lのうち1点が部分的縦位施紋による羽状となっています。文様を持つものは5点で、うち口縁部1点あり、黒浜(古)新相～(中)が3点と、黒浜(新)～諸磯a(古)が2点あります。

無繊維の土器のうち6点は金雲母を含み内面に指頭圧痕が顕著な釈迦堂Z3式です。この型式は、山梨県域を中心に分布し、西南関東では黒浜式各段階の遺跡に少量伴うことが確認されています。大破片2

点、口縁部 3 点あり、縄紋はすべて単節で、RL3 点、LR2 点、L1 点です。RL のうち 1 点是一部縦位施紋による羽状です。

その他の無繊維の土器は 56 点あります。大破片は 4 点、縄紋のみが 43 点で、うち口縁部は 6 点あります。縄紋は単節主体で、RL が 29 点、LR が 13 点、無節 L が 1 点（諸磯 b 式の可能性がある）あり、羽状構成のものは見当たりません。開端結節の圧痕が残るものが 1 点、閉端部圧痕が残るものが 1 点あり、文様を持つものは 13 点で、うち口縁部は 3 点です。大破片は胴部 1 点のみです。諸磯 a 古段階 5 点と、中～新段階 4 点、特定困難 4 点（うち 1 点は諸磯 b の可能性あり）です。

復元個体の観察

これまでに写真が公表された 5 点を観察し、そのうち 4 点を実測しました（第 3 図）。

1 は多量の繊維を含む、直線的に少し開く深鉢です。底部以外が約半周残存しており、口径 27cm 前後、残存高 27.0cm です。平縁であるが不規則にうねっています。内面は磨かれており、外面全面に 0 段多条の単節 LR（条幅 6.2mm）を施しています。概ね横位施紋ですが、底部に近い程右下がりになっています。口唇は縄紋施紋によるはみ出しがそのまま、再調整していません。外面は上半が暗く下半が赤く、内面は中位に黒味がかっており、煮沸使用痕跡と考えられます。

2 も多量の繊維を含んでいます。また、白色針状物（海綿骨針）も僅かに含んでいます。垂直気味の下胴部から屈曲して外に開き、口縁の少し下から内湾する鉢または深鉢と思われます。上半部の約 2/3 周が遺存しています（直接接合しない 3 ブロックに分れる）。口径は 34cm 前後、残存高は 14.7cm を測ります。角頭状の口唇に三角形の小突起を付しており、4 単位付されていたと思われます。残存部では 1 箇所 2 つの突起が 2cm を開けて付けられています。他遺跡では全単位が対突起の場合と、対突起と単独突起が交互に配される場合が認められます。突起貼付後に内面と口唇を丁寧に磨き、突起も三角形に整えられています。遺存範囲には縄紋が無く、ナデ調整の上に幅 6.5mm の半割管状施文具を用い施

文されています。上胴部全面に地紋のように横線を施し、交差はせず、平行線とも呼べない雑な施文です。横線のピッチは、下位が狭く、口縁近くは広い傾向があります。描線のストロークは長く、小突起による単位は切れ目になっていません。次に小突起の下が V 字状になるような、交互異方向平行斜線を 8 単位描いています。斜線のピッチは 3cm 前後で、1 単位に 7 本が隣の単位の斜線と接するように描かれています。この接点を縫うように縦線が引かれています。このため、縦線は真っ直ぐではなく、斜線接続部を過ぎたところで止まっています。縦線に、同一施文具を垂直に押した爪形文を数センチ間隔で施しており、爪形文と斜線接続部は対応していません。内外面とも焼成時の黒斑が明瞭に残ることから、長時間火に掛けられたことはないように思われます。

3 は無繊維または繊維微量で、内湾気味の体部から口縁の少し下で外反する深鉢です。整った平縁です。上半部の 1/6 周が遺存しており、口径 34cm 前後、残存高 15.5cm を測ります。内面は削りに近い磨きで、口唇まで連続しています。口唇には面を持ちません。外面全体に単節 RL（条幅 4.3mm）を丁寧に横位施紋され、圧痕に開端（結節）が見える部分が 1 箇所あります。開端は下向きで、煮沸使用したようですが明瞭ではありません。

4 は無繊維で、緩くくびれる甕状の深鉢です。緩やかな波状口縁でおそらく 4 単位と思われます。口縁～胴部の 1/5 周が遺存しており、口径 32cm 前後、残存高 20cm を測ります。内面は磨きで、口唇はつまむような撫でとがらせ、ヘラ状工具で刻んでいます。外面全体に単節 RL（条幅 5.3mm）を丁寧に横位施紋され、端部は見えませんが、外面は上～中位が暗く最下部が赤くなっており、内面は下位に薄く焦げ付いています。煮沸に使用した痕跡です。

5（第 2 図 1）も無繊維です。緩くくびれる甕状の深鉢で平縁を呈しています。写真では底部を除き半周以上遺存していますが、現物が確認できるのは写真の左半分のみです。口径は約 25cm、残存高は約 31cm です。内面は削りに近い磨きで、口唇まで連続しており、口唇に面を持ちません。外面全体に単節 RL（条幅 3.9mm）を丁寧に横位施紋するが底部

に近い程右下がりになっています。開端（結節）が見える部分が1箇所あり、開端は上向きです。外面は最大径付近が黒く最下部が赤くなっており、内面は下位ほど黒く、煮沸に使用した痕跡が認められます。

資料の評価

4と5は典型的な諸磯a式で、この種の深鉢が黒浜期に出現している確実な例は知られていません。3のような無繊維の深鉢は、黒浜（新）に存在することが明らかになっています。1は典型的な黒浜式で、諸磯a式への共伴は考えにくいものです。

2は極めて特異な文様構成で、類例を知りません。要素に分けて検討すると、諸磯a式に残存する繊維土器は、精製ともいふべき丁寧な調整のものが目立ちますが、1も丁寧な作りなので胎土からは時期を限定することができません。器形は下手類型（黒浜（中）～（新））の典型ですが、この器形は米字文類型（黒浜（新）～諸磯a（中））に採用されて諸磯a（古）にも残ります。下手類型と米字文類型は、口縁や括れ部に横帯文（横位区画）を持つことが通常ですが1は持ちません。下手類型は、黒浜（中）では、コンパス文や爪形文を織り込んだ整った文様ですが、黒浜（新）では横線ばかり目立つものがあり、1と近似しています。横線を地紋とみれば、地紋→斜線→縦線の順序は米字文類型と一致しています。米字文類型は黒浜（新）では斜線にも爪形文を施すことが多く、諸磯aでは爪形文を伴わないことが多く、文様帯中位に横線を挟み菱状構成になります。東関東に分布する葉脈文類型は、黒浜期でも爪形文を伴わず、菱状構成にならないことが多く、横位区画帯を持たないものも多く認められます。これらを総合すると、構成が崩れた下手類型に葉脈文を重ねたものと思われます。おそらく黒浜（新）式であるが、諸磯a（古）式も否定することができません。

住居跡の時期を検討すると、竪穴の平面形と柱穴配置は、諸磯a（古）式に多いものであるが、黒浜（新）式には出現しています。繊維土器が過半を占めることから、黒浜（新）式には埋没が始まっていたとすべきだろう。このため、確実に床面から出土した1と2も黒浜（新）式とした方がよいと考え

られます。問題は柱穴出土土器で、写真左側の割れ口を3～5に照らしたものの、特定には至って居ません。江坂論文の記述を仔細に読むと4を指すようであり、そうであれば住居跡の時期に矛盾が生じます。しかし、写真を見ると柱穴下部に貝殻が堆積しています。これは、居住を終えたあとに上屋を解体し柱を抜いたためと考えられ、床面より新しい土器が柱穴に入っているともよいと思われます。

以上、この資料は、黒浜～諸磯a移行期の、現在の知見ですら評価が微妙な資料であり、重要性に気付いた江坂の視点は誤りないものです。

おわりに

この資料の歩みをたどるうち、大戦の影を追っているような思いがしました。吉田氏自身が報告できなかったこと、報告で土器の図示が欠けたこと、江坂論文の写真が不鮮明であったこと、いずれも、戦中～戦後の情勢によるものであります。江坂氏は報告の半年後に出征し、酒詰氏は空襲で家を焼かれました。この春、江坂氏が逝去し、戦時の学界を知る方が絶えようとしています。故人を偲びつつ、埋もれた資料を再評価することで供花としたい。

資料の観察、報告にあたって立正大学博物館の多大なご配慮をいただきました。鈴木徳雄氏には貴重なご意見をいただきました。感謝します。

(2015/9/23 秋分の日 稿了)

【註】

- (1) 酒詰仲男ほか 1937「横浜市篠原町表谷（東）貝塚に於て諸磯式の住居跡発掘」『考古学雑誌』29（3）
- (2) 酒詰仲男 1942「横浜市篠原貝塚群とその表谷（東）貝塚に於ける一住居跡について」『人類学雑誌』57（5）
- (3) 江坂輝弥 1939「関東縄文式土器の層位的出土遺跡の集成」『考古学』10（4）
- (4) 酒詰編（2010）の1942年6月12日の記述によると、長谷部言人の指示で、図版は2枚（遺跡平面図と住居跡実測図）に削られ、江坂との連名も認められなかった。前者は戦時下での印刷資材の制約が一因であろう。酒詰治男編 2010『酒詰仲男 調査・日録 第4集』東京大学総合研究博物館
- (5) 「大」の誤植か？
- (6) 以下に続く土器の記載から、本稿の1と2に該当することが確実
- (7) 江坂輝弥 1951「縄文式文化について（9）」『歴史評論』31
- (8) 報告のために作成された図版の転用と推定する
- (9) 筆者が「水子式」の研究史を検討した際の所見。早坂広人 1993「『水子式』の誕生」『土曜考古』17
- (10) 加藤秀之 2002『富士山の発掘三十年』水子貝塚資料館
- (11) 立正大学博物館 2008『吉田格 縄文文化研究の業績～吉田格コレクション～』現在も常設展示されている。

NEWS ①

入館者数

平成 27 年 4 月 1 日から平成 27 年 9 月 30 日の間、延べ 117 日開館し、総来館者数は 978 名でした。内訳は、一般の方 268 名、本学学生 322 名、本学教職員 44 名でした。以上の期間中に熊谷キャンパスにおいてオープンキャンパスが 4 回行われました。その際の来館者数は 344 名でした。また、地球環境科学部の博物館展示論や地圏環境実習、学習の基礎 I などの授業の一貫としても利用していただきました。その他の団体見学としては、寄居城北高等学校 PTA、吉井高等学校、さらに直実市民大学などの生涯学習関連の利用がありました。

資料活用

平成 27 年 4 月 1 日～平成 27 年 9 月 30 日までの期間に、当館所蔵の資料を以下の機関に貸出を行いました。

◆『撫石庵コレクション考古資料図録 III』写真データ一式

貸出機関：ビジネス教育出版社

貸出期間：平成 27 年 6 月 11 日（木）～6 月 26 日（金）

利用目的：ビジネス教育出版社・創業者（真鍋孝志）の「偲ぶ会」パンフレット掲載・偲ぶ会の際にスライドショーとして使用。

出版物

平成 27 年 4 月 1 日から平成 27 年 9 月 30 日までの期間に、当館では以下の出版物を刊行しました。

◆『立正大学博物館年報』13 号（平成 27 年 4 月 30 日）

◆立正大学博物館案内リーフレット（平成 27 年 4 月）

◆第 10 回企画展図録

『立正大学の海外佛跡調査』（平成 27 年 6 月 19 日）

◆オリジナルクリアファイル（平成 27 年 8 月 17 日）

訃 報

ビジネス教育出版社創設者で、立正大学博物館へ撫石庵コレクションを寄贈された真鍋孝志氏が、平成 27 年 5 月 4 日に御逝去されました。享年 85 歳。謹んでお悔やみ申し上げます。



真鍋孝志氏

真鍋氏は、わが国における梵鐘の研究者として著名な坪井良平氏に教えを受けられ、長年梵鐘の研究に携わるとともに、古鐘研究会の会長としてもご活躍されました。御著作には『江戸東京梵鐘銘文集』（平成 13 年）、『梵鐘遍歴』（平成 14 年）があります。こうした真鍋氏の功績を讃え、平成 7 年に（財）元興寺文化財研究所奨励賞を、平成 17 年には紺綬褒章を受けられました。

真鍋氏より寄贈された撫石庵コレクションは、平成 14 年の立正大学博物館の開館にともない、仏教考古学を特徴とする当館における重要資料の 1 つとして展示されています。

また、平成 18 年には、撫石庵コレクション中の白眉である「伝榎原市出土鐘」の復元鐘を製作され、当館へ寄贈されました。実際に鳴らすことができるこの鐘の音は、多くの来館者に親しまれています。

撫石庵コレクションは、美術品としての価値の高さは言うに及ばず、学術的な観点からも非常に貴重な資料群であります。今後も当館の重要資料として活用をはかってまいり所存です。

改めてご生前のご厚情に深く感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

見学者の声

当館に寄せられたご意見・ご感想をご紹介します。今後とも、皆様の声を博物館運営や展示に反映できるよう務めてまいります。貴重なご意見・ご感想をありがとうございました。

◆第一展示室の鐘の音に驚きました。きれいな音で、よく響いていてすごいと思いました。(13歳・女性)

◆もう一度、学生になって学びたい大学だと思いました。とても勉強になりました。(44歳・女性)

◆家族3名で来ました。めずらしいもの、たくさん見せていただいてありがとうございます。

不思議な世界にひたりました。(66歳・女性)

◆国内外の梵鐘を拝見できて大変有意義な時間でした。(58歳・女性)

◆コンパクトにもかかわらず豊富な展示に感心。鐘・骨臓器等珍しいものに感激。ありがとうございました。綺麗でした。(65歳・男性)

利 用 案 内

所在地：〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700

立正大学熊谷キャンパス内

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

開館日：月・水・木・金・土曜日(大学休業中を除く)

開館時間：10:00～16:00

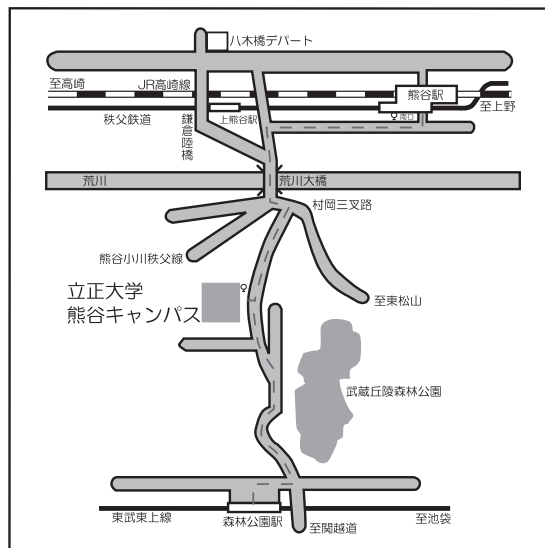
※詳細につきましては、博物館ホームページをご覧ください。

交通機関：

① JR 高崎線、北陸新幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス(国際十王交通)で約10分。

② 東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス(国際十王交通)で約12分。

お問い合わせ：博物館または熊谷総務部総務課
(048-536-6010)にご連絡下さい。



あ と が き

今年度は、昨年度に引き続き、企画展及び品川キャンパス展を行いました。また、展示活動と平行して各先生方からご寄贈いただいた資料の整理も継続しており、順調な滑り出しを見せていると思われます。今後はこれらの寄贈資料の整理・活用に尽力してまいりたいと思います。当館への変わらぬ御支援の程宜しくお願い致します。

また、早坂広人氏には当館所蔵の吉田格コレクション・表谷東貝塚出土土器に関して研究成果を執筆していただきました。ありがとうございました。

(三宅)

題字揮毫 田 淵 観 斎 (立正大学名誉教授)

立正大学博物館館報 万吉だより 第21号

平成27(2015)年11月1日発行

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

E-mail: museum@ris.ac.jp

URL: <http://www.ris.ac.jp/museum/index>

(印刷：アサヒコミュニケーションズ)